

日本語学習における母国の文化・習慣の影響について

— 中国人の学習者を対象として —

馮 富 栄¹⁾

問題と目的

外国語の教授法で伝統的なものとして挙げられるのは、対訳法と直接法であり、それについての論争も長く続いていた。ところで、最近では対訳法か直接法かという二者択一の見解が薄らいできており、むしろ学習環境を重視するようになってきている。そのため外国事情も教材に取り入れるべきだと主張されるようになった。しかし、外国語教育に関するこのような議論の中には、明らかに学習者側の要因が見落とされていると思われる。すばらしい教授法、教材というものは、具体的な学習活動、具体的な学習者、さらにその学習者の持っている具体的な学習の問題点に適用してはじめて、成り立つものだと考えている。

外国語学習中の学習者にとって、問題点となりうるものとして、母国語の言語体系と学習する外国語の言語体系の相違が挙げられる。つまり両言語体系の異同は、学習の難易度と関連があると考えられる。たとえば同じ日本語を学習しているにしても、欧米人は漢字に悩んでいるのに対し、中国人は漢字でよかったと思っているかもしれない。それは中国語には漢字があるからである。ゆえに言語体系の異同と学習の困難度の関連を検討することによって、学習の問題点を明らかにすることが期待できる。

言語体系は一応独立したものはあるが、その社会の文化・習慣からの影響も無視できないであろう。たとえば同じ“強い女”(中国語に訳すと“強女人”)であっても、中国の社会ではポジティブな表現となるが、日本の社会ではネガティブな表現になりかねない。これは、中国人と日本人の異なった女性の理想像に由来すると考えられる。頑張りやの女性は、共働きの中国の社会では尊敬されるが、家庭のために尽くす女性を高く評価している日本の社会ではそれほど賞賛されていない。このようにして、文化・習慣の相違が直接言語の使用に影響を

及ぼしている。

ゆえに、外国語の学習過程における学習者の問題点を検討する際、言語体系の相違を吟味すると共に、その言語学習に影響を及ぼしうる文化・習慣の相違を検討することも必要である。しかし現在のところ、それを検討する研究は少ない。日本語と他の言語の相違を詳しく検討する研究は多く見られる。しかし両言語の相違が如何にして、外国語としての日本語学習に影響を及ぼすか、特に文化・習慣の相違によって、外国人が日本語を学習するとき、いかなる問題点が起きるかについては、それほど検討されていないと言える。

そこで、この研究は中国人の日本語学習に及ぼす中国の文化・習慣の影響について検討することを目的としている。主として、断わる意味の“いい”・感謝に用いる“すみません”及び敬語表現の学習に焦点を絞る。なぜならばこれらの表現は“思いやり”・“立場志向”を代表とする日本の文化・習慣と関わっており、“率直さ”・“事実志向”を特色とする中国の文化・習慣と異なっているため、中国人は学習しにくいであろうと考えているからである。

日本では相手への“思いやり”を非常に大事にする。ゆえに相手の好意を断わるときにも簡単に“NO”は言わないのである。そのかわりに“いい”を使用したりする。また日本人は謝るときだけでなく、感謝のときにも相手への迷惑を察して“すみません”をよく用いるようである。しかし“いい”に相当する中国語の“好”は肯定の意味しか持たない。また“すみません”に相応する中国語の“对不起”も謝るときにしか用いられない。ゆえに相手への“思いやり”よりは“率直さ”を特色とする中国の社会では、“好”を用いて相手の好意を断わったり、また“对不起”をもって相手の親切に感謝したりすることは考えられないことである。こうしたことを踏まえて考えると、断わる意味の“いい”と感謝の意味に用いる“すみません”は中国人にとって理解しづらいものであろう。

日本語表現の特色は“立場志向”であると言われて

1) 名古屋大学大学院博士課程(後期課程)

いるが、その“立場志向”を代表するものとして日本語の敬語表現が挙げられよう。日本人は敬語表現を用いる場合は、身分の“上下”という事実よりはむしろ“内外”という立場を優先的に考慮する。したがって自分より地位が“上”であるが自分の“内”の人だと謙譲語を使ったり、自分より“下”であるが“外”の人だと尊敬語を用いたりする。しかし中国人は敬語表現を用いるとき、“内外”という立場と比べて身分の“上下”をより大切にする。ゆえに“内外”による日本語の敬語の使い分けの学習が中国人にとって困難だと考えられる。

以上の議論から以下の仮説を立てた。

仮 説

仮説1：断わる意に用いる“いい”と感謝の意味に使う“すみません”の学習は、中国人にとって困難であろう。

仮説2：日本語の敬語表現を学習するとき、“内外”による日本語の敬語の使い分けは、中国人の学習の問題点となる。

以上の仮説を検討するために、質問紙調査を行った。

調 査

方 法

1. 対 象

中G：日本語を専攻している中国のある国立大学の大学生で、日本語学習期間は平均2年、35名（男性14名、女性21名）である。

日G：日本のある国立大学の日本人大学生で、25名（男性9名、女性16名）である。

2. 質問紙の構成

質問紙は、6項目からなっている。項目1から項目4までは、“すみません”と“いい”の用法に関するものであり、項目5と項目6は日本語の敬語表現に関するものである。

項目1は図Aと図Bからなっており、どちらも男性の落とした鞆を女性から教えてもらったときの場面である。ゆえに2つの図はほぼ同様であるが、違うのが男性のお礼の言葉だけである。図Aには“すみません”，図Bには“ありがとう”が用いられた。そしてそれぞれどういう場面なのかと被験者から回答を求めた。

項目2は友人から九州からのおみやげをもらった場面の会話である。そのお礼として“すみません”を用いた。そしてその“すみません”の使いかたが適切か否かを判断してもらった。

項目3は2つの図からなっているが、図Cは友人達が

一緒にお茶を飲む場面である。中には“李さんお茶を飲もうか？”，“あつすみません。”という会話があった。図Dは洋服屋の場面で、中には“この服はいま流行っていますよ、いかがでしょうか、奥さん？”，“はい、いいです。”という会話を書いてあった。そしてそれぞれの会話を読んで、それぞれどういう場面かを尋ねた。

項目4は2つの会話文からなっている。会話①は、引越しのお手伝いをしようかという相手の好意に対して、“いいわよ”と断わった場面のものである。会話②は、映画の切符を2枚持っているのと一緒に見に行きませんかという相手の親切に対して、“どうもすみません”とお礼を言った場面である。そしてその“いいわよ”と“すみません”は、それぞれ何を意味しているかと質問した。

項目5は“伊藤課長さんはいらっしゃいますか？”，“伊藤はいまおりませんが”というFとGの会話である。そしてFとGが、それぞれ伊藤と同じ会社か、違う会社か、伊藤より地位が低いか、高いか、それとも同じかという5つの質問を被験者に出した。あっていると思うものに○をつけてもらった。

項目6はA会社の服部部長とB会社の社員近藤との会話文であるが、内容は以下である。

近藤：最近部長さんはお忙しそうですね。

服部：そうですね。特にこの2、3日ね。

近藤：聞くところによると堀田社長さんは入院なさったようですが、喘息ですって？

服部：ええ、あれは社長の持病ですから。でも、だいぶよくなりましたよ。ご心配をおかけしてどうもすみません。ところで奥田課長さんは北海道へ出張なさったと聞きましたが。

近藤：ええ、奥田だけでなく、石川部長も一緒にまいりました。

A 会 社	B 会 社
服 部 部 長 堀 田 社 長	近 藤 社 員 奥 田 課 長 石 川 部 長

Fig. 1 質問紙項目6の登場人物の相互関係

そして身分の“上下”と立場の“内外”をはっきりさせるために、登場人物の相互関係を Fig. 1 のように示した。質問は敬語の使用に間違いがあればそれを訂正することであった。

結果と考察

感謝の意に用いる“すみません”と断わる意味に使う

Table 1
項目1 図Aの結果

	中G	日G
謝る	31	6
その他	4	19

Table 2
項目1 図Bの結果

	中G	日G
礼	35	19
その他	0	6

Table 3
項目2の結果

	中G	日G
適切	1	18
不適切	34	7

Table 4
項目3 図Cの結果

	中G	日G
飲む	6	22
その他	29	3

Table 5
項目3 図Dの結果

	中G	日G
買う	22	7
その他	13	18

Table 6
項目4の①の結果

	中G	日G
手伝ってほしい	29	10
その他	6	15

Table 7
項目4の②の結果

	中G	日G
断わる	33	7
その他	2	18

“いい”について

項目1の図Aの結果をTable 1, 図Bの結果をTable 2に示した。図Aと図Bは、男性のお礼の言葉が異なっている以外は全部同様である。しかし、この異なった返事に対しては、中国人と日本人とに異なった反応が見られた。図Aの“すみません”に対して、“女性の鞆を落としたので謝った場面だ”と答えた中国人は31人で、日本人は6人である。 χ^2 検定を行ったところ、有意差($\chi^2=25.72, p<.001$)が見られた。これに対して、図Bの“ありがとう”に対しては、中国人も日本人も同様に、“落とした鞆を女性から教えてもらったのでお礼を言った場面だ”と答えた人が多かった。

Table 3は項目2の結果である。この場合に“すみません”が適切だと判断した中国人は1人だけであるのに対し、日本人は18人であった。 χ^2 検定を行った結果、有意差($\chi^2=31.16, p<.001$)が見られた。

項目3に関しては、図Cの“すみません”を“お茶を飲む”と理解した中国人は6人で、日本人は22人であることがTable 4から分かる。 χ^2 検定の結果、有意差($\chi^2=29.42, p<.001$)が得られた。図Dの結果はTable 5である。この“いいです”に対しては、“買う”と判断した中国人は22人で、日本人は7人である。 χ^2 検定を行った結果、差がやはり有意($\chi^2=7.10, p<.01$)であった。

項目4の結果をTable 6とTable 7に示してある。①にある“いいわよ”を“手伝ってほしい”と理解した中国人は29人で、日本人は10人である($\chi^2=11.77, p<.001$)。②にある“どうもすみません”を断わると判断した中国人は33人で、日本人は7人である($\chi^2=28.13, p<.001$)。項目4の両方にも有意差が出ている。

以上、分かるように感謝の場面の“すみません”に

関しては、中国人の理解が日本人のそれと異なっていることが明らかにされ、中国人の日本語学習の問題点となることが検証された。この結果から中国人の日本語学習者は“すみません”の持っている“詫げる”意味しか理解していないことが示唆された。それゆえ、“男性が詫げているから女性の鞆を落とした場面だ”、また“詫げているから進められたお茶、誘われた映画を断わった場面だ”と判断したのであろう。それは、“すみません”がイコール中国語の“对不起”という考えに起因すると考えられる。“对不起”には詫げる意味しかないからである。

ところで、なぜ日本人は感謝のときにも“すみません”というのであろう。それは日本の文化・習慣と、どう関連するのであろう。“すみません”については、ベネディクト(1951)が“これは、終わりがありませんという意味のことを言う。つまり私は貴方から恩を受けました。ところで、現代の経済組織の下では、私は到底貴方に恩返しをすることはできません。私はこのような立場におかれたことを遺憾に存じます”と述べた。ここでベネディクトは、“すみません”を、恩恵を蒙ったときの返礼できないという苦痛の気持ちとして捉えた。

これとは違って、土居(1980)が“私は、この「すみません」という語は元来、動作や仕事「済む」という場合の否定形ではないかと思う。私にはどうも、「済まない」と考える方がこの言葉の用法と合っているように思われてならない。というのは、やるべきことをやっていないから「済まない」のだと考えられるからである。したがって、この言葉には相手に迷惑をかけたことに対する詫げるの気持ちが強く現れている。そしてそのことこそ、実は相手の親切を謝するにも「済まない」という言葉が用いられる理由なのである。すなわち、親切の行為

をすることがその行為の主にとって、若干の負担となったであろうことを察するから「すまない」というのである」と述べている。ここで、土居は“すみません”を人の好意に対して負担をかけたと察して詫げるのだと説明している。

上の2説は、どちらも道理にあうように思えるが、どちらにも不足があると思われる。これを説明するには、まず“すみません”と“ありがとう”の区別から検討してみる。この区別については、土居もベネディクトも触れなかった。“すみません”は、“ありがとう”の意味に用いるが、決して“ありがとう”の同義語ではないと思う。この両者を区別する尺度は、土居の述べた相手に迷惑をかけたか否かだと思われる。例をあげてみると、たいへん手に入りにくい本が非常にほしい場合は、友人が苦勞してやっと買ってきてくれたとする。そのとき、“ありがとう”よりは“すみません”のほうが適切であろう。それは相手に迷惑をかけたからである。

しかし礼儀正しいことで世界的に評判になっている日本人は、迷惑をかけた相手に対してただ詫げることに甘んずることも考えにくい。土居が述べているように“相手が失礼と取りはしないか、その結果、相手の好意を失いはしないか”との恐れから“すみません”と詫げたのだということだけでもないと思われる。結婚にせよ、不幸にせよ、また普通の付き合いにせよ、返礼を重んずる日本人はやはり、ベネディクトが述べているように、恩恵を受けたときお返しをしようという気持ちはあると思う。これからお返しをする、つまりまだお返しがされていないから、“済まない”のではないだろうか。

このようにして、“すみません”は相手に“ご好意、またかけたご迷惑がよくわかりました。決して当り前だとは思っておりません”などの暗示でもあるし、また“私たちの友好関係はこれで済むではありません。これから私もなんとかしてさしあげなければ……”との慰めでもあると考えている。いわばこの感謝に用いる“すみません”は日本文化の特色——“思いやり”をよく表わしていると思われる。

しかし“率直さ”を賞賛する中国の文化には、人から恩恵を受けたとき、日本人のような“すみません”という感情は少ない。中国人は人から受けた好意に対して、感謝すればいい、“ありがとう”と言えればいい。皆無とは断言できないが、中国人は受けた恩恵という事実を目を注ぐが、背後にその主にとってどれだけ負担になったかに関しては、日本人ほど考慮に入れないようである。したがって、日本人と違って相手の好意に対して一歩下がって詫げるのではなく、真正面から率直に受けるので

ある。ゆえに“ありがとう”というのである。

なぜ感謝の意を表わすとき、西洋人は日本人のように“すまない”感情が残るのではなく、“サンキュー”なのであろう。それについて、土居(1980)は“それは、西洋の歴史は日本のそれに比較して、政治的に遙かにおおくの激しい動乱を経たため、人々がそれぞれ自分を守ることに徹するようになったからであろう”と指摘している。このことがそのまま中国人にもあてはまると思われる。

それ以外にもう1つの要因が考えられる。それは日本人が大事とする人間関係における低姿勢である。つまり“すみません”は、1種の低姿勢の現れではないかと思う。それは目上の人に“ありがとう”よりは“すみません”のほうがより頻繁に使われることから裏付けられよう。いわば“私こそやってさしあげるべきなのに、やっていただいて悪かった。”との発想からきたものだと考えられる。しかし日本人と対照的に、56民族からなる12億の中国人は、すべて1大家族であり、低姿勢よりは平等な態度を重要とする。

感謝に用いる“すみません”と同じように、断わる意に用いる“いい”に対する中国人の理解も日本人のそれと異なっていることが結果から明らかにされた。項目3の図Dと項目4の①では、日本人は両方とも断わる意味だと判断したのが多いのに対し、中国人は両方とも肯定の意味に判断したのが多数であった。それは、恐らく中国人は“いい”を中国語の“好”に理解しているからである。“好”にはほとんど肯定の意味しかないが、“いい”には否定の意味もある。ゆえに否定に使う“いい”の学習が、中国人にとって困難であることが結果から分かった。

中国人は肯定のとき、あるいは相手のことを認めるときは“好”を用い、否定のときは“不好”を使用する。西洋人と同じで、“YES”は“YES”で、“NO”は“NO”である。しかし日本人は場合によって“いい”は否定となりうるので、はっきりしないのである。そもそもはっきりすることは、日本の社会では奨励されていないと思われる。はっきりすると、自己主張にもなるうし、また相手を否定しかねない。そこでいやおうなしに衝突が生じたり、相手を傷つけたりする可能性はある。無論、これは日本社会の文化・習慣と食い違っている。日本人は相手を傷つけることはなによりも嫌いであるし、また相手の意を察しないで自分の意見をあからさまに出すこともよしとしないのである。

しかし人の前で堂々と自分の意見を述べ、相手の意見を平気で否定する中国人は、“直来直去”(はっきりしている)という処世法を大事にする。コミュニケーション

ンとき、絶えず相手の立場を念頭に置く“立場志向”の日本人と違って、中国人は“事実志向”で、話を進めている。ゆえに相手の話を否定しても事実を否定するだけで、それほど相手を傷つけないで済む。また中国の社会では、自分の意見をあからさまに出すのがよしとされる。目標を損ねるまで人間関係を潤滑に守ろうとするのは、“ずるい”と言われ、好まれていないのである。

中国のある有名な劇の中に、ある英雄人物が言った“我喜歡直来直去”（私ははっきりするのが好きだよ）という有名な台詞がある。要するに曖昧よりは、はっきりしたほうが中国の社会から高く評価される。ゆえに、同じ“はっきりしているね”と言われたとしても、その受けた感じが中国人と日本人とでは異なっていると考えられる。なぜならば、中国人ははっきりしたほうが人格は立派だとするが、日本人はむしろ忍耐を成熟の指標とするからである。

日本人は中国人と違って相手を傷つけたり、否定したりすることは、如何なる場合でも極力回避しようとするようである。それがゆえに、相手を否定しようと思っても、簡単に“NO”といえないのであろう。そのかわりに、“いい”か“結構”などのような肯定の形に変えて表現している。その“いい”と“結構”というのは、“私は今の状態ではもう満足だよ。こんなにして頂いてもう十分だよ”という意味に取れるように思われる。つまり断わる意味に用いる“いい”は、そもそも相手の恩恵を断わる時から始まったものだと考えられる。

このようにして、“いい”で否定しても、自分の状態を言っているだけで、相手を傷つけずに済むのである。この断わる意に用いる“いい”も、感謝に用いる“すみません”と同様に、“思いやり”を代表とする日本の文化・習慣を十分に表しているものと思われる。

水谷が英語をテニス、日本語をバレーボールにたとえて言ったことがある。日本語の表現様式について、彼(1987)は“たとえば、相手のあげたボールが悪いボールであっても、極力努力してそのボールを受けなければならない。また相手にボールを返す場合には、相手にとりやすいようにボールを送り返さなければならない”と述べている。この比喩は見事に相手の気持ち・立場を重んずる日本語の“思いやり”を表わしていると思われる。

しかし中国語は英語とは違ってテニスではないと思う。その表現様式は、相手の取りにくいような、また相手と対立するような形で話を進めているものではない。もし同じボールで比喩するならば、私は中国語をボーリングに比喩してみたい。すなわちコミュニケーションのとき、まるでボーリングをやるのと同じように、前のピン(事

実のこと)だけに注目して話を進めるのである。周囲にはあまり気を配らない。

以上、感謝の意味を表す“すみません”と断わる意味に用いる“いい”に関して考察し、その2つを日本文化の“思いやり”と関連付けて論じてきた。この2つの用法が中国語の言語体系にはないし、率直さを特徴とする中国文化と異なっているため、中国人の学習しにくい問題点となることが明らかとなった。ゆえに仮説1は検証された。

日本語の敬語表現について

次は、中国人の日本語の敬語学習、主として中国人が何を目当てにして尊敬語と謙譲語を使い分けるかを検討してみる。つまり中国人の日本語学習者が日本語の敬語表現を用いる場合は、相手が自分の“内”か“外”かという立場を重んずるか、それとも相手が自分より“上”か“下”かという事実により注目するのであろうか。

項目5の結果であるが、Fが伊藤とどういう関係かに対する中国人と日本人の結果をFig.2に、Gに関する結果をFig.3に示した。中国人と日本人の被験者数が異なっているので、比較しやすくするために各質問の回答者数をパーセンテージに変換した。Fig.2から分かるように、Fが伊藤と違う会社だと回答したのは日本人が一番多かったのに対し、Fが伊藤より地位が低いと判断したのは中国人が一番多かった。ここで面白いのは、Gが伊藤とどういう関係かという質問に対しても同様な結果がFig.3から得られた。この結果からはっきり分かるように、日本人は敬語表現を用いるとき何よりも“内外”という立場のことを配慮しているが、中国人は“内外”の立場よりは、むしろ地位の“上下”を重視している。

中国人が日本語の敬語表現を用いるとき、日本人と違って地位の“上下”を優先的に考えているということが確かに言えるのであろうか。それをより検討するために、

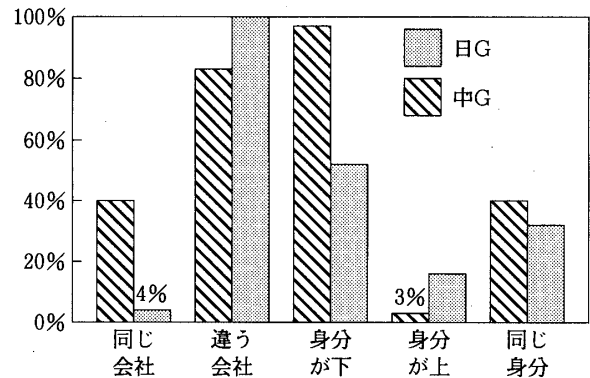


Fig. 2 Fと伊藤の関係における中G・日Gの結果

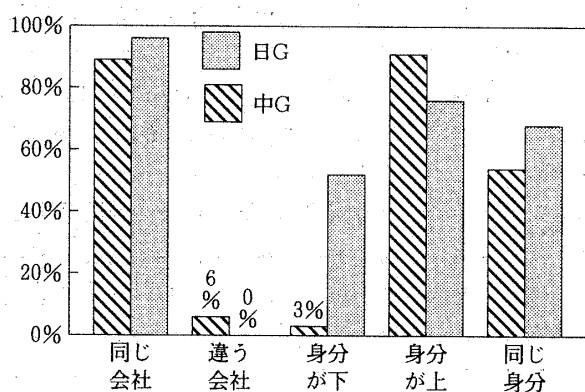


Fig. 3 Gと伊藤の関係における中G・日Gの結果

FとGがそれぞれ伊藤より地位が低いかな否かの結果を詳しく吟味した。Fが伊藤より地位が低いと判断した中国人は34人であるのに対し、日本人は13人であった。X²検定を行った結果、有意差 ($x^2=17.51$, $P<.001$) が見られた。またGが伊藤より地位が低いかという質問においては、伊藤より地位が低いと判断した中国人は1人だけであるのに対し、日本人は12人いた。X²検定を行ったところ、同様な結果 ($x^2=17.51$, $P<.001$) が得られたことは興味深いものである。

このような結果が出たのは、恐らく“Fが伊藤に尊敬語を使ったので伊藤より地位が低いのであろう”。また同様に“Gが伊藤に謙譲語を用いたので伊藤より地位が高いのであろう”という中国人の判断によるものだと考えられる。いずれにしても、立場の“内外”による日本語の敬語表現の使い分けが中国人にとって困難であることが項目5の結果から裏付けられた。

上述したように、項目6も日本語の敬語表現に関するものであるが、結果はまちまちで統計的にまとめるににくい。しかし基本的に仮説2を支持した結果が得られた。特に4, 5句目は中国人によって直された。4句目の“ご心配をおかけしました”を、“ご心配なく”、“ご心配させて”、また“心配をかけて”に直したのは、それぞれ1人いた。これは恐らく“話者の服部が近藤より地位が上なので、近藤のままで自分を遜る必要はない”という中国人の判断からきたものであろう。また同じ4句目の“出張なされた”を、“出張した”には5人、“出張致しました”には1人であった。これも恐らく“話者の服部が奥田よりも上だから、奥田を敬う必要もない”と判断したからであろう。

5句目に関しては、“奥田”のあとに“さん”を付けたのは3人、“課長さん”をつけたのは4人であった。さらに“まいりました”を“行きました”に直したのは7人、“いらっしやいました”には5人いた。これもまた“近藤は奥田よりも、石川よりも地位が低いから、

奥田に“さん”か“課長さん”をつけないとまずいし、自分の上司である石川を遜ってはいけない”という中国人の判断によるものだと考えられる。

これとは対照的に、日本人は基本的には直さなかった。ただ“奥田”に“課長”をつけたのは7人いたが、そのかわり“石川部長”の“部長”をとったのは6人いた。これは恐らく文脈の前後一致への配慮によるものだと考えられる。つまり後ろに“部長”を用いるのなら、前にも“課長”をつけたほうがよい、あるいは“課長”を使わないなら、“部長”も取ったほうがよいということであろう。

以上から分かるように、日本語の敬語を使用するとき、日本人は話題人物よりはまず聞き手のことを考慮に入れる。それから話題人物が自分の立場——“内”に入るか、それとも相手の側——“外”に立つかに注目する。これとは対照的に、中国人は聞き手より話題人物に重点を置き、その人物が自分より“上”か“下”かという事実を重視する。ゆえに、自分より地位が上であるが自分側の人だから謙譲語を使ったり、あるいは自分より下であるが相手側の人間だから尊敬語を用いたりすること、いわば“内外”による敬語の使い分けが、中国人にとって難しいことが項目6の結果からも示唆された。

上述したように項目5も項目6も日本語の敬語表現に関するものである。しかし質問の仕方が異なっている。項目5は敬語表現から話者と話題人物との関係を回答してもらうものであり、項目6は話者と話題人物の関係を図に示し、それによって敬語表現の正誤を判断してもらうものである。いわば問題の出しかたが逆である。しかしそれにもかかわらず、中国人が日本語の敬語表現を用いるとき、“内外”よりはまず“上下”のほうに注目することがどちらの結果からも裏付けられた。ゆえに仮説2も検証された。

ここで問題なのは、この“内外”の使い分けを如何にして中国人の日本語学習者に教えるかということである。水谷(1987)によると、“この「内」、「外」の関係は物理的な関係で、「内」と「外」とに分けてみるということではなく、むしろ自分を中心にして、その属している枠を「内」、そしてその「内」の外側にあるものを「外」とする”という。

土居も他の視点からこの“内”、“外”について述べている。彼(1980)によると、“遠慮の有無は、日本人が内と外という言葉で、人間関係の種類を区別する場面の目安となる。遠慮がない身内は、文字のとおり内であるが、遠慮のある義理の関係は外である。しかし、また義理や知人を内の者と見なし、それ以外の遠慮を働かす必要のない無縁の世界を外と見なすこともある。いずれ

にせよ、内と外を区別する目安は、遠慮の有無である”という。

上述したどちらの説を読んでも、なるほどと肯ける、とても的を得た指摘だと思う。しかしこの“内”と“外”の見分けルールは、一言、二言で概説できるものではないように感じられる。ここで述べたいのは、この“内”と“外”の境界が固定的なものではなく、流動的なものだという点である。かなり柔軟性を持つ概念だと考えている。その中で大事なのはどうも水谷が述べた“自分という枠”だけでなく、土居の指摘した“遠慮の有無”だけではないと思う。

なぜならば、“自分自身を中心にしてその属している枠を「内」……”と言っても、その枠はどこまでに属するかははっきりしていない。また土居自身も指摘しているように、遠慮のない“内”以外にも全く遠慮を働かす必要のない他人の世界である“外”があるので、一様に遠慮の有無で分けるのも混乱が起こりかねないからである。日本人はどうも相手に応じて“内”の枠を広げたり、縮めたり、さらに無くしたりするように調節しているように思われてならない。相手は外の会社の人だとその枠は会社であるし、相手は外国人ならその枠は国となろう。

では、敬語表現を用いる場合、なぜ日本人には“内外”という意識が働くのであろうか。なぜ中国人にはその意識がそれほど強くないのであろうか。その原因については、今後の研究を待つが、とにかく一義的なものではないということが言えよう。それは、自然、歴史、文化、社会的な影響、民族性など各種の要因が絡み合ってきたものだと考えられるが、中には特に日本人の強い集団意識に帰する人もいるであろう。

ほぼ同一民族からなり、外界から切り離された島国という環境の中で長く生活してきたためか否かは断言できないが、日本人は自分の小集団を大事にすることは事実である。中根(1968)のタテ社会の理論に従うと、日本社会の発展と成功のひとつの大きな原因は、この集団意識がうまく働いたことにあるという。しかし中国では、小集団主義はむしろ嫌われている。56民族からなる中国人は、各民族の大団結を重んじ、中国語で表現すると各

民族は“一家人”である。ゆえに“内外”はあまり意識されていないのである。したがって、中国人に日本語の敬語表現を教えるとき、この“内外”による使い分けを特に配慮する必要がある。

全体の要約と今後の課題

以上、日本語の“思いやり”・“立場志向”と中国語の“率直さ”・“事実志向”を中心にして述べてきた。調査の結果からは仮説1も仮説2も検証された。仮説1の検討によって断わる意に用いる“いい”と感謝の意に使う“すみません”は、中国人にとって学習しにくいことが明らかとなった。仮説2の考察によって中国人は日本語の敬語表現を学習する場合は、“内外”による尊敬語・謙譲語の使い分けが困難であることが検証された。このようにして、この研究は中国人を対象とする日本語学習の問題点を提起することができ、日本語教育現場に有効な示唆を与えた。しかしこうした中国人の日本語学習上の問題点を如何にして解決したらよいかについては、この研究では触れていない。これを実験的に検討することが今後の研究課題である。

参 考 文 献

- 土居健郎 1980 甘えの構造 弘文堂
 木村宗男・窪田富男・阪田雪子・川本 喬 1989 日本語教授法 桜楓社
 ルース・ベネディクト 長谷川松治(訳) 1951 菊と刀 日本文化の型 現代教養文庫
 水谷 修 1987 はなしことばと日本人 創拓社
 中根千枝 1968 タテ社会と人間関係 単一社会の理論 講談社
 中嶋嶺雄 1986 日本人と中国人どこが大違い 文芸春秋
 宇野義方 1985 敬語をどのように考えるか 南雲堂
 芳賀 綏 1979 日本人の表現心理 中央公論社

(1993年8月25日 受稿)

ABSTRACT

The Influence of Native Culture and Accustoms
on Japanese Learning Process
— Based on Chinese Experience —

Feng FURONG

The purpose of this research is to discuss the influence of native culture and accustoms on Japanese learning process. What effects can be produced by the difference of Chinese culture and Japanese culture are discussed in this paper.

The main conclusions that can be drawn are as follows: (i) When Japanese use “いい” to express their rejection and “すみません” to express their thanks, it is very difficult for Chinese to master the language. (ii) It is also very difficult for Chinese to master the humble and honorific form while using with “Inner and Outer” relationships.